

多文化共生の池袋

——立教大学の果たす役割を考える——

上田 信

コロイン・ステファニー

吉岡知哉

立教大学では二〇一四年に「Rikkyo Global 24」を公表し、さらなる国際化を進めています。十年後の二〇二四年には現在約五百名の外国人留学生在が二千名となる見込みですが、アジアとりわけマレーシア、インドネシアなどイスラム教圏からのムスリム学生が増えることが予想されます。様々な文化的背景を持つ学生が安心して衣・食・住を組み立てるために、大学は何をしなければならぬでしょうか。池袋という大きなコミュニティの一員でもある立教大学が、多文化共生にどのように取り組んでいこうとしているのか、吉岡総長をゲストに迎えて伺います。

池袋コミュニティの一員としての立教大学

——留学生が行き交う街となるために——

上田 みなさん、こんにちは。上田と申します。私が副所長として関わっております立教大学ESD研究所では現在、文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として、地域創生を考える研究プロジェクト「ESDによる地域創生の評価とESD地域創生拠点の形成に関する研究」を進めています。ESDとは「Education for Sustainable Development」の略称で「持続可能な開発のための教育」と訳されます。二〇一四年の日本創生会議で、

消滅可能性都市——二〇四〇年頃に人口が半分ほどに減少し消滅することが予測される地方自治体が発表されました。日本全体における少子高齢化や地方の過疎化は、かねてより指摘されていたことでしたが、消滅が予測される具体的な地方自治体名やその消滅時期が公表されたのははじめてのことです。日本全体が大きな衝撃をうけました。それをきっかけに安倍政権でも「地方創生」が政策として掲げられています。

「地方創生」、「消滅可能性都市」と聞くと、過疎に悩まされる山村を思い浮かべる人がほとんどだと思いますが、じつは豊島区も消滅可能性都市に選ばれてしまったのです。池袋は人通りが多く、人口が減少していくと言われても想像しにくいかもしれませんが、しかし、よく調査してみると、子育てをしている世代が少なく、単身者が多いという実態にたどりつきます。

日本創生会議のその後の議論に関してはさまざまな批判があります。消滅可能性都市として指定された自治体は今後の具体的な対策を講じることになりました。ESD研究所としても豊島区の問題を考える必要があります。区との連携を図りながら、池袋学をひとつのよりどころにして、みなさんと交流の場を持つていくことになると思います。豊島区のコミュニティの一部である立教大学は、池袋にある大学としてどのように貢献していけるのでしょうか。

本日のテーマは「多文化共生」です。立教大学の国際化戦略構

想「グローバルリベラルアーツ×リーダーシップ教育×自己変革力―世界で際立つ大学への改革―」が文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援(グローバル化牽引型)」に採択されました。この構想は二〇一四年に公表した国際化戦略「Rikyo Global24」を基盤にしたものです。現在、世界各地から留学生を受け入れ、グローバル化を推進する大学として展開しているところです。

そうした中で、立教大学は二〇二四年までに二千人の留学生を迎えることを目標としています。この目標が達成されると、さまざまな出身地から、多様な文化的背景を持った学生が、立教大学に集まってくるようになります。二千人の留学生のうち、七割から八割が池袋キャンパスに通い、池袋を往来することになります。そうした留学生が、池袋あるいは豊島区という街にさまざまな文化を広げていく可能性についてお話したいと思います。

■多文化共生の街、池袋

池袋は、もともと多文化共生の場であったと言えます。たまたま去年の十一月に沖縄県立美術館に行った際、戦後に美術家たちが活動を行っていた「ニシムイ」という地区の展示会(「ニシムイ―太陽のキャンパス―」)がありました。沖縄と池袋の関係はあまり知らなかったのですが、展示をみていく中で、南風原朝光という画家が池袋モンパルナスを中心に活躍していたことがわかりました。池袋モンパルナスには、沖縄出身の芸術家も多く関わ

っていました。泡盛酒場である（おもろ）でたくさんの芸術家が交流を深めていました。現在も（おもろ）は東京芸術劇場の裏側にあり、私も昔から通っています。

一九七〇年代頃まで、文化や言語の面で他地域との違いが大きいことから沖縄出身者が差別的にみられる側面がありました。しかし池袋では沖縄出身者を分け隔てることなく受け入れていました。戦後、集団就職上京した沖縄出身者の中にも池袋に住む方が多かつたそうです。沖縄だけでなく、東北出身者の方々も言語的な違いから差別を受けることがあったようですが、池袋はそうした中でも温かく迎えてくれる地としてしばしば語られています。

戦後に中国や韓国などから移住してきた人びとも、池袋を住みやすい街と考えていたようです。新宿などの勤め先からアクセスしやすく比較的地価が安いということもあります。しかし、同時に、池袋には文化の違う人を排除するのではなく手助けしていく風土があり、さまざまな国の人びとが住みやすい場所であったからでもあるでしょう。池袋は昔からそうした場所として認知されてきました。

■留学生からみた池袋

現在留学生にとって池袋がどのような場所なのか、これまでの半年間、インタビューや座談会を開通じて調査してみました。池

袋の魅力はゲームセンター、居酒屋、カラオケなど、リーズナブルな価格で賑わえるような場所が多く挙げられました。そうしたところは留学生にとつても大きな魅力であるようです。もうひとつは、東口の乙女ロードを中心としたアニメ文化です。中国などでは、アニメ文化が若い世代を中心に大変人気を集めていて、池袋はアニメの聖地として知られています。アニメ文化の発信地に留学したいという理由で留学先を立教大学に決める学生も多々いるようです。

座談会に参加したある留学生は、自分の家の近くの公園でネパールの方と交流したり、日本人サラリーマンの愚痴を聞いたりして交流していると話していました。こうしたかたちで、他の国の人たちと交流したり、地域の中に住んでいる日本の方と交流したりする経験を持っているわけです。

別の学生は、池袋駅から立教大学への道のりが非常にわかりにくいと言っていました。西池袋は道が入りこんでいますし、外国から来た人にとつてはわかりにくく、工夫が必要になるところかと思えます。

■宗教と食

もうひとつは飲食店が多くあるところです。ご存じのとおり、北口には本格的な中華料理店が多くあり、中国の調味料や食材を購入できる店もあります。西口のほうは、東京芸術劇場から立教

大学に来るまでの道のりには非常に多くの飲食店があります。池袋に多くある外国人が経営する飲食店は、留学生にとっては、くつろげる場所であるようです。

中国に限らず、池袋にはさまざまな国の料理を専門とした店があります。その中で「マレーチャン」というマレーシア料理のお店があります。これは西池袋公園の隅にあるお店で、ハラール認定レストランです。ムスリムが豚肉を口にできないことはご存じだと思いますが、ほかの食品についても決められた工程を守って処理されたものでなければ、食べることができません。こうした工程を経るなどして、イスラム教において食べることが許されているものを「ハラール」といいます。

経営者の福澤筈子さんは、マレーシア人留学生の居場所をつくるために「マレーチャン」を開いたそうです。福澤さんによると日本でハラールを入手するのは非常に困難な状況にあります。東京デイズニールランドに遊びに来た人が、家族をパーク内に残して家族分のお弁当を、往復二時間も掛けて買いに来たこともあったそうです。

立教大学の中には、信仰を持つ学生のために大学構内に礼拝スペースが設けられています。ムスリムに限らず、宗教を明示せずになだれでも使える祈りの部屋というかたちで、十五号館（マキムホール）の三階に設置されました。礼拝準備のためのスペースも設けられています。

立教大学の食堂「カフェテリア山小屋」には、ハラールフードとしてカップヌードルも置いてあります。麺だけで具が入っていないのが寂しいところです（会場笑）。ですが、ハラールフードを学食で提供することは、調理場等を分けなければならぬため、現状ではほぼ不可能であるといえます。ハラール認証を得たお弁当などを用意するなどの工夫が求められるでしょう。

大学とは、多くの留学生を受け入れる場所です。そうした場所と周辺地域がどのようにつながっているのか、今後も考えていきたいと思っています。

銭湯の魅力

ステファニー みなさんこんにちは。ステファニーと申します。よろしくお願ひいたします。私は二〇〇八年から二〇〇九年にかけて、日本の現代文化を学ぶために、立教大学の社会学部に交換留学生として留学していました。立教大学にはまた来たいと思っておりますが、このような機会をいただけるとはまったく想像していませんでした。たいへん嬉しく思っています。

私が銭湯と出会ったのは、二〇〇八年——ちょうど交換留学で立教大学に来ていた時でした。同じ授業を履修していた友人が銭湯についての論文を執筆していて、銭湯に誘われたのがきっかけです。当時は、銭湯がどのようなところなのか全く知りませんでした。

した。交換留学以前にも日本に来たことはありましたが、銭湯については、街にあるローカルなお風呂という認識しかありませんでした。

私ははじめて行った銭湯は、立教大学から徒歩で十分ほどのところにある（妙法湯）です。私の出身国フランスでは、他人の前で裸になる文化はありません。そのため少し恥ずかしく感じましたが、それも最初のうちだけでした。当時はあまり日本語を話せませんでした。常連のお客さんが優しく話しかけてくださって、それもすごくいい経験だったと思います。それで銭湯をすごく気に入って、立教に在る間は毎週通いました。

交換留学終了後はしばらく日本を離れていましたが、二〇一二年に日本の企業に就職しました。慣れないことも多く大変でしたが、疲れが溜まっていた時に銭湯のことを思い出し、また通いはじめました。そうした中で、銭湯を利用するだけでなく、文化や経営事情など、より多くのことを知りたいと思うようになりました。

現在は、銭湯に関するさまざまな活動をしています。たとえば外国人のガイドをしたり、写真などの銭湯に関する情報をSNSでシェアしたりしています。講演なども引き受けています。自分だけで楽しむのではなく、ほかの国の人たちにも銭湯の魅力を発信していきたいと思っています。

■美容と健康

よく「自宅にお風呂があるのにどうして銭湯に行くのか」と聞かれます。フランス人の私が考える銭湯の魅力は主に三つです。ひとつは美容や健康への効果、二つ目は銭湯のコミュニティ、三つ目は銭湯のアート・芸術です。

まず、美容と健康について話したいと思います。私はよく銭湯で年配の方とお話ししますが、みなさん驚くほど肌がきれいです。やつやとしています。この間もとてもきれいなおばあちゃんと銭湯で出会ったのですが、聞くと彼女は八十歳だということ、本当に驚きました。また、私自身も美肌効果を実感しています。私たちが住む都会の空気はあまりきれいではありません。大気中の汚れが肌に付着すると、肌の老化が進みます。銭湯でしっかりと身体を温めてデトックスすることで、肌がきれいな状態になり、そのあとのスキンケアの効果も上がります。

みなさんは、HSP（ヒートショックプロテイン）をご存じでしょうか。HSPとは、細胞を修復するタンパク質のことです。免疫力や新陳代謝を高めたり、コラーゲンの減少を抑えたりする機能があり、美容にとっても効果的だと注目を集めています。銭湯で身体を温めると、体内でHSPの生成が促されるので、美容への効果が期待できます。また、銭湯に通いはじめてからは風邪を引きにくくなり、肩こりもずいぶん軽減しました。健康の面でも銭湯の効果を日々感じています。

■コミュニティ形成の役割

このように、銭湯で入浴することで得られる温かさは、美容と健康に非常に効果的です。加えて、銭湯には人間的な温かみもたらすものもあると思います。銭湯は、入浴ができる施設であるというだけでなく、そこでは地域のコミュニティが形成されています。こうした銭湯のコミュニティを通じて考えたことが、三つあります。

まず、銭湯はマナーを学べる場であるということです。銭湯におけるコミュニケーションは、まずのれんをくぐって挨拶をするところから始まります。挨拶は、いろいろな人たちとの交流の初歩です。常連さんが集まるとにぎやかになりますし、私もよく常連さんたちと会話を楽しみます。その際、マナーを守ることが大切になってきます。とくに外国人の私は、入浴のマナーを守っているか心配されやすいため、人一倍丁寧に銭湯を利用するようにしています。

銭湯にあまり慣れていなかった時、濡れたまま脱衣所に戻ってしまったことがあります、叱られました（会場笑）。大人になって叱られたのは恥ずかしかったです、マナーをきちんと教えてくれる場所があるのは大切なことだと感じました。ものを大切につかうことは周りに配慮することでもありますし、子どものしつけという面でもとても有益なことだと思います。

二つ目は、銭湯は、人と人の心がふれ合う場所だということ

です。銭湯には毎日多くの人が訪れます。さまざまな年代のさまざまな背景を持つ人が、ひとつの場所で裸の付き合いをします。ひとり暮らしの高齢者の方にとっても、銭湯はいろいろな人と交流を持てる場所となっています。銭湯は、年齢や立場に関係なくいろいろな人が話ができる場所です。銭湯では、単に集団で入浴をしているというより、リフレッシュする時間を共有しています。こうした心のふれあいを通じて、地域の方々との関係をより深めることができると思います。私は留学していた時、銭湯でいろいろな人と話すことができて、とても勉強になりました。留学生にはとくに銭湯をおすすめしたいです。

三つ目は、銭湯には情報ステーションとして機能している側面があるということです。銭湯は昔から街の中心的存在で、銭湯の主人や常連客はその地域にとっても詳しいです。そうした意味で銭湯は地域の情報ステーションであるといえるでしょう。たとえば、新しい街に引っ越してその街の情報がない時、銭湯で得られる情報はとても役立つでしょう。

私は旅行の際、必ずその土地の銭湯を利用します。ガイドブックに載っているところではなく、地域の人が利用しているおいしいレストランや居酒屋の話を知りたいと思うからです。そうすることで、その地域のローカルな文化を体験することができ、とても有意義です。

このような、銭湯のコミュニティとしての側面は、私が銭湯を

好きになった理由のひとつです。銭湯に通いはじめた頃は、あまり日本語が話せませんでした。けれども、銭湯のご主人や常連さんが、優しく私とコミュニケーションをとろうとしてくださって、非常に感動しました。またコミュニケーションにおいて、言語能力以上に大切なものがあることを強く感じました。銭湯の温かい雰囲気は、銭湯の建物とそこに集まる人びとが作り出します。

よりよい雰囲気をつくっていくために、集まる人の一人ひとりの姿勢が重要だと思います。そのため、われわれはマナーを重んじ、銭湯のコミュニティを大切にしなければなりません。

■アートとしての銭湯

銭湯をあまり利用されない方は驚かれるかもしれませんが、銭湯ではいろいろなアートに出会えます。たとえば、伝統的な銭湯は宮造りという建築方法で建てられています。日本のお寺や神社とまったく同じ建築様式になっていて、歴史や文化を感じることのできる設計になっています。銭湯は一軒一軒でそれぞれ異なるので、インテリアを見てまわるのも楽しいところです。それから、とても美しい庭を持つ銭湯もあります。

次に、銭湯の壁に描かれているペンキ絵を紹介したいと思います。よく知られているのは、富士山の絵だと思えます。日本の銭湯のペンキ絵の三割くらいが富士山です。日本には銭湯絵師は三人しかいません。丸山清人さん、中島盛夫さん、それから田中み

ずきさんです。描きかえるときは一日くらいかかります。

また、ペンキ絵のほかに、モザイクタイル絵というものもあります。季節の花などを描き込んだとてもきれいな絵です。どちらも日本独自のアートで、銭湯の大きな魅力となっていると思います。

■立教大学近辺の銭湯

せっかくこうした機会をいただいたので、みなさまに立教の近所にある銭湯をいくつか紹介したいと思えます。残念ながら数が減っていますが、立教の徒歩圏内にまだまだおすすめしたい銭湯がたくさんあります。

最初は西池袋にある〈妙法湯〉です。私のはじめて行った銭湯なので、一番思い入れが深いところです。優しいご主人が魅力です。きれいで使い勝手がいいつくりになっています。常連さんが多いですが、若い人も多くいらつしゃいます。ボディソープとシャンプーが備え付けてありますので、思った時に手ぶらで行くことができます。水風呂と、ジャグジー、バイブラ湯、マッサージ風呂もあります。日替わりの薬湯も楽しめます。プラスチックになりませんが、ヒノキのサウナもあります。休憩スペースでビールが飲めるところもおすすめする理由のひとつです。

次は〈湯くゆランドあずま〉です。立教から徒歩十分ほどのところにあります。昭和の雰囲気漂う銭湯で、銭湯初心者におす

すめです。ゆったりした休憩スペースがあり、とてもくつろげます。お風呂の温度が三つから選べます。ここに来るとテレビを見ながら若い人と話ができて、本当にリフレッシュできます。広いサウナや岩風呂もあり、本当におすすめです。

次は〈山の湯〉です。こちらは、要町の住宅街の中にあります。少し見つけづらいですが、すごくレトロな雰囲気を持った銭湯です。木でできた脱衣場には昔ながらのものもたくさん置いてあるので、日本の文化に興味のある方には非常におすすめです。たとえば、二十円入れると使えるドライヤーがあつたりして、私も使ったことがあります。とてもおもしろいですよ。

〈山の湯〉のペンキ絵は、先ほどご紹介した丸山さんが手がけたもので、銭湯には珍しくすごくカラフルです。湯船が真ん中に設置されているのは関西では一般的ですが、関東では珍しい様式です。無料のチームサウナがあるので、デトックスをしたい方におすすめしたいと思います。

本日はご紹介した銭湯は、三軒ともそれぞれの魅力を持っています。機会がありましたら、ぜひ足を運んでみてください。どうもありがとうございました。

対談——多文化共生と立教大学の役割

上田 冒頭で述べましたとおり、現在、立教大学はグローバル化

を進めています。さまざまな国の大学と協定を結び、連携をとりながら国際化も推進しているところです。しかしながら、六大学の中でみた時、立教大学の受け入れ留学生数は一番少ないという現状があります。早稲田大学や慶応義塾大学などには非常に多くの留学生がいます。東京大学の文学部などについては、特に大学院では日本人の学生よりも海外から来た学生の方が多いという話も耳にします。

そうした中で、立教大学は、二〇二四年に現在の四倍程度——約二千人に留学生を増やしていくことをめざしています。まずは、吉岡総長から、立教大学のグローバル化について今後の展望をうかがえればと思います。

吉岡 立教大学は、一八七四年（明治七）に聖公会の宣教師であったウィリアムズ司教が築地につくった大学です。創設者が外国人でしたから、外国人の教員やスタッフが多くいたそう。いわゆる富国強兵の時代に創設されたわけですが、その当時から立教大学はリベラルアーツを教育理念としてきました。そうした意味では、立教には創立当初から国際性があつたといえるでしょう。

外国人留学生受け入れ数については、国立の場合は大学院生全体の数が圧倒的に多いので、その分、受け入れ数が非常に多くなっています。一方で、立教の場合は大学院よりも学部で受け入れている学生の方が多い状況です。

また、海外に行く学生の数をみると、他大学に比べ本学は圧倒的に多いです。現在は約千人が海外へ行っています。たとえば東京大学では、国外へ行く学生が非常に少なく、色々な仕組みを作って最近ようやく増えてきたところですが、国外から来た学生がキャンパスにもたらず国際性とそして国外へ行って戻ってきた日本の学生がもたらす国際性があります。国際化とはこの二つによって進められるものであると考えています。

本学のグローバル化についてお答えします。そもそも、グローバル化とは何か。そこには、グローバル化と国際化の違いは何かということも関わってきます。グローバル人材を育成する必要がある一方、日本文化の良さを「クールジャパン」として海外にアピールしていくべきだということも政府の方針として示されています。

グローバル化と国際化という概念は、両者の区別が曖昧なまま用いられていることが少なくありません。すべての人間がグローバル化と国際化を明確に区別しているわけではないし、個人によって使い方が異なる場合があります。

私の考えでは、グローバル化とは、現在に至るまでの歴史の趨勢——極端に言えば、資本主義の論理にしたがって近い将来自然と実現してしまう状態のことです。科学技術の飛躍的な発達にともない、人間や物、情報が動いていく上で国境というものが意味を為さなくなりつつあります。

近年、インターネットを通じて簡単に情報を入手でき物事の様相が手に取るようになるようになりました。それと同時に市場は均一化され、英語が世界言語になろうとしています。世界の多様性を知ることと引き換えに、市場原理をもっとも重要な原理として世界が均一化していくことがグローバル化だと考えております。

一方で、大学の国際化には多様性を作り出していくことが必要です。学生が海外へ行って自分とは異なる世界を見ることは、世界の多様性を知ると同時に、自分の中で多様性を自覚していくことでもあります。あるいは、海外から日本に来た人たちが多様性を身に付けて帰って行くということも国際化につながっていくでしょう。

そうした点から言えば、国際化とは、いわば反グローバル化です。やはり大学としては、反グローバル化的なことに挑戦していきたい。これが立教のグローバル化の展望です。

上田 多くの大学が英語を外国語教育の軸にしている中で、立教大学では、第二外国語としてスペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語から言語を選択して履修することを義務づけています。こうした選択必修科目としての第二外国語の学習のほか、学生がいろいろな言語に触れられるよう、多くの教員が工夫しています。教育の場において、総長がおっしゃった多様性がどのように実現されていくか、何かお考えがあればお聞

かせいただきたく思います。

吉岡 学生に外国語を二言語履修することを課しているのは、母語をきちんと話すことを前提として、国際的な通用語となりつつある英語を習得した上で、その両方を相対的に見ることを可能にするためです。その際に重要になってくるのが第二外国語です。このような多文化的なカリキュラムはこれからも取り入れていくつもりですし、海外へ学生を送り出す制度も整えていきたいと考えています。

上田 私は授業の中で「〈earth〉と〈globe〉はどちらも〈地球〉という意味ですが、それぞれの語に対してどこが中心か？」という問いを投げかけます。〈earth〉ですとまさに天体としての中心——核を表します。一方で〈globe〉は表面を表す語なのでどこでも中心になり得ます。立教大学は、まさに池袋を中心として多文化を取り入れようとしています。そのあたりについてもう少しお話を聞かせていただけないでしょうか。

吉岡 現在、本学では、中国、韓国の留学生が非常に多い状況です。次いで台湾、アメリカ、フランスなども多く、ほかにもさまざまな国から留学生が来ています。アフリカ圏から来ている学生もいます。今後さらに多くの国の大学と協定を結び、英語に限らずいろいろな国に学生を送りたいと考えています。違う世界に足を踏み入れた時に得られることを大切にして、学生にも多様化してほしいと考えています。

上田 特別外国人留学生ではなく正規過程の留学生でさえ、そのほとんどが立教大学にある江戸川乱歩邸のことを知りません。留学生を対象に池袋や立教のことを教える制度が必要であると考えます。また、留学生同士が知り合い、つながる機会がどうしても少ないと思います。留学生同士の交流の機会を設けることも必要であると感じますが、いかがでしょうか。

吉岡 乱歩邸については、正規の学生でも知らない場合が多いので、まず全体に知らしめる方法を考えなければならぬと思っています。留学生については、現在日本人の学生も留学生も入れる寮をつくる計画を進めています。また、サークルや体育会には積極的に留学生を受け入れるように要請しています。できるだけいろいろな国の留学生が集まるように、検討を重ねていくところです。

上田 私も大学時代に中国へ留学していた経験がありますが、留学期間中は現地の学生と接することはほとんどありませんでした。留学生同士も知り合えて、留学生と日本人学生も知り合えるというのは国際化にとっても意義のあることだと思います。信仰を持っている留学生の食事の面ですが、立教のハラルフードには、カップラーメンのようなものがわずかにあるばかりです。このような点については、どのようにお考えでしょうか。

吉岡 たしかに食事の面では、菜食主義者やムスリムの学生に対

する十分な配慮は間に合っていないのが現状です。もちろん、今後ハラルなどの充実に積極的に取り組んでいくつもりではありますが、幸い立教の近くにはハラルフードを提供している飲食店があります。こうしたところには、立教大学には地の利があります。イスラム教圏だけでなくさまざまな国の料理が食べられるので、街との連携も図っていききたいと考えています。

■質疑応答

質問① 本日は多文化共生についてお話しいただきましたが、そもそもなぜ共生をしなければならないのでしょうか。

吉岡 じつに核心をついた質問で、お答えするのがなかなか難しいですが、やはりグローバル化の波に逆らうことは非常に困難だということが、共生を考えなければならない理由です。グローバル化は、われわれの抗いようのないところで実現してしまっています。そのため、そこでいかに共生していくかを、われわれは考えていかなければならないと思っています。

上田 このたび「多文化共生」というタイトルをつけさせていただいた手前、「共生」についてお話しする必要がありますと思います。「共存」は「共生」と似た言葉ですが、少し異なります。生物学的に言うところ、異なるもの同士がお互いにメリットがある中で、ともに生きることを「共生」といいます。一方で、お互いに折り合いをつけて最低限お互いに相手を否定しない関係

を「共存」というかと思えます。「共存」の次のステップとして、ともに生きる者両方にメリットがある「共生」というものを考えたいと思い、今回のタイトルをつけました。

ただ、難しく考える必要はまったくありません。たとえば、文化的背景の異なる人との交流が楽しいということは「共存」のひとつの出发点だと思います。また同時に、多文化を知ることで、日本文化の意義に気づくことができると思います。ステファニーさんの銭湯のお話もそうで、日本人の多くは自宅にお風呂があるのであまり銭湯を利用しません。ステファニーさんの「銭湯はアートだ」というお話にはハッとさせられました。このように、他の文化と交流する中で自分の文化の長所や短所を発見することがあると思います。また、そうした発見によって自分の文化をより豊かにしていけるのではないのでしょうか。それは、交流する者両方にいえることです。そうしたことから「多文化共存」ではなく「多文化共生」という言葉を用いました。

質問② これから二千人程の留学生を受け入れるということですが、その中にはおそらく自費留学生が多いと思います。自費留学生はアルバイトの労働時間を週二十七時間に制限されており、経済的に困窮される方が多くいます。それに対してはどのように対処するのでしょうか。また、留学生を二千人受け入れることについて、高度人材として日本に定着させるために、

立教大学として何か方策はあるのでしょうか。

吉岡 留学生の経済状況は、個人によって異なります。たとえばアメリカの大学の留学生をみるとわかると思いますが、必ずしも留学生のすべてが経済的に困窮しているわけではありません。裕福な留学生もいればそうでない留学生もいます。立教では多くの奨学金制度を設けていますし、交換留学の場合、学費の納入は不要です。本当に困窮している人を含め、留学生全員にとって十分といえるかはわかりませんが、経済的な支援に関しては立教大学としても力を入れているところです。

留学生の定着についてですが、日本に定着するつもりで来た留学生には、キャリアセンターが中心になって、日本の企業に就職出来るよう外国人向けのキャリア教育を行なっています。一方で帰国を前提として留学してくる学生もいます。最近ではアジアの大学院生が多いのですが、そうした留学生が立教に来て学んでいくシステムをつくっています。

多様な選択肢があつて、すべてがうまくいっているとは言えませんが、留学形態についても、いろいろなあり方を提案しています。たとえば、大学院の修士課程の二年間のうち、一年を立教でもう一年を母国で学び、学位を取得して母国で就職する方もいます。

留学生はじつにさまざまな動機で日本にきています。基本的にはそれぞれの希望に沿って支援しています。日本への定着を

積極的に促すことはあまり考えていません。たとえば母国で就職の機会を持つているような場合は、基本的に帰国して就職することを勧めていますし、日本での就職を希望する留学生にはそれに沿った就職の支援をします。ただ、これは留学生に限ったことではなく、日本人の学生についても同様です。日本で就職する選択も海外で就職する選択も両方ありうると思います。本学では、まず学生の自発性を尊重するようにしています。

上田 本日は意義深いお話を伺うことができました。吉岡総長、ステファニーさん、どうもありがとうございました。

(うえだ・まこと 立教大学文学部教授)

(ころいん・すてふあにー 社団法人日本銭湯文化協会銭湯大使)

(よしおか・ともや 立教大学総長、立教大学法学部教授)